

センター事業活用事例

戦略的基盤技術高度化支援事業(経済産業省委託)

開発力と小ロット生産を武器に 国内ならではのものづくりを



昨年、創業者である父(現会長)から経営を引き継いだ佐藤宗樹社長。
手にするのは携帯電話のアンテナ部分のモールド。

株式会社ホクシンエレクトロニクス

日本国内の製造業の多くが海外に太刀打ちできない状況になって久しい。しかしその一方で「日本でなければ出来ないものづくりがある」と考える企業もある。顧客が求めていることに耳を傾けて、培った開発力で高付加価値製品を生み出す。人の手技が求められるから大きな雇用も生まれる。

株式会社 ホクシンエレクトロニクス

〒010-0062 秋田市牛島東一丁目11-8
Tel. 018-837-0811
Fax. 018-837-0812
<http://www.hokushin-elec.co.jp/>

日本のもづくり維持に事業特化

秋田市牛島地区に本社と工場を構える株式会社ホクシンエレクトロニクスは従業員数約250名と、市街地にある製造業としてはかなりの規模である。

国内の多くの製造業が生産拠点を海外にシフトしたりする中で、同社が250名もの従業員を抱えて盛業中でいられるのは、小ロット製品の製造や人の手作業に多くを依存する小物や大型装置の製造を得意として、それに事業を特化してきたためである。

世界市場目指して医療機器分野に

「創業当時はコードレスホンのアンテナ製造から始まり、携帯電話のアンテナ製造も手掛けるようになっ

て、それが我が社の主力製品でした」(佐藤宗樹社長)

しかし、限られた取引先ではリスクもあり、半導体製造装置の製造、フレキシブル基板の加工と検査など、徐々に取り扱い品目を増やしてきた。

今後の有望な分野として医療機器関係を視野に入れて取り組んでいる。あきた企業活性化センターの仲介で経済産業省の「戦略的基盤技術高度化支援事業」に採択され、人工呼吸器に組み込まれる超音波流量計(超音波を使って空気の流れる量を計測する装置)の開発製造に取り組んでいる。超音波流量計自体は目新しい技術ではないが、より低コストでより高精度な製品をつくり出すことには、同社が培ってきた開発技術と製造技術が生かせる。

この医療機器関連分野への挑戦が評価され、秋田県ものづくり中核企業育成集中支援事業の支援対象企業に認定されている。

顧客の求めに応じられる開発力

同社の開発スタンスは、自社で独自にゼロからモノをつくり出すのではなく、顧客から「こういったものはないだろうか」という声を聞き出し、その要求に応えられるものを開発して提案していくという手法である。そのため、秋田市新屋町砂奴



本社と同じ牛島地区にある第一工場。(写真上)
多品種小ロット生産に対応して柔軟にアレンジできる作業環境。(写真中)
携帯電話部品の射出工程。モデルチェンジごとに金型を新規でつくり対応。(写真右)



開発部門の要となる開発研究室を秋田県産業技術センター内に構える。

寄の秋田県産業技術センター内に自社の開発研究室を構え、数名の専任スタッフで開発業務を行っている。時代に求められているものに耳を傾け、それを開発して製造するまでの技術を擁していることが、この会社の強みである。



人工呼吸器に組み込まれる超音波流量計。(写真左)
少ないLEDで効率よく面発光体をつくる省エネLED導光板。(写真右上)
歯学部の実習用につくられた歯の神経のモデル。精緻な加工技術がないとできない。(写真右下)